慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	"Journeys end in lover's meeting" : The haunting of Hill HouseにおけるEleanorの死
Sub Title	
Author	野津, みづほ(Nozu, Mizuho)
Publisher	慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻『コロキア』同人
Publication year	2022
Jtitle	Colloquia (コロキア). Vol.43, (2022.) ,p.59- 70
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	米文学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00341698-20221215-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

“Journeys End in Lover’s Meeting”
——*The Haunting of Hill House* における Eleanor の死——*

野津　みづほ

はじめに—犠牲者としての女

いまもホラーもしくはゴシック小説家として根強い人気を持つ Shirley Jackson は、犠牲になる女性たちを描くことが多い。もちろん、「犠牲者としての女」の伝統は Jackson から始まったものではない。例えば Ann Radcliffe の *The Mysteries of Udolpho* (1794) をはじめとして、Henry James の *The Turn of the Screw* (1898) や、Charlotte Pearls Gilman の“The Yellow Wall-Paper” (1892) などにも見られるものだ。こうした伝統につらなる Jackson もまた、女性を主要人物にすえる物語が多い。題材はバラエティに富んでいるが、おしなべて作品が書かれた時代と内容が密接に関係しているのが特徴として挙げられる。

Ellen Moers は *Literary Women: The Great Writers* (1963) の中で、Ann Radcliffe を後のゴシック文学の形式を定着させた作家として位置づけるのはもちろん、女性の描写における特徴についても述べている。“As early as 1790s, Ann Radcliffe firmly set Gothic in one of the ways it would go ever after: a novel in which the central figure is a young woman who is simultaneously persecuted victim and courageous heroine” (92). つまり、多くのゴシック小説では、若く勇気ある女性が迫害され、犠牲になる様子が描かれる。こうした作品は女性の手によっても頻繁に書かれるようになり、Moers がそれを Female Gothic 呼んだことをきっかけに、女性のゴシック文学伝統が後続の批評家たちによって研究されるようになった[1]のである。

Diane Long Hoeveler は *Gothic Feminism: The Professionalization of Gender from Charlotte Smith to the Brontës* (1998)の中で Female Gothic を社会政治的な観点から定義をしている。

> The female gothic constitutes what I would call rival female-created fantasy—gothic feminism—a version of “victim feminism,” an ideology of female power through pretended and staged weakness. . . .Such an ideology formed not only the message of the female gothic but also accounts for the works’ popularity among women readers who covertly wanted to believe that they could challenge or in some way passively subvert their newly inscribed institutionalized “spaces,” while

* 執筆にあたっては慶應義塾大学教授・大串尚代先生ならびに佐藤光重先生の丁寧なご指導と貴重なアドバイスをいただきました。ここに記し、深く感謝申し上げます。

[1] Ellen Moers をはじめとして、Cynthia Griffin Wolff、Nina daVinci Nichols、Ann Ronald などが Female Gothic について論じている。

> maintaining their identities and roles as the wives and mothers of the bourgeoisie. (7)

Hoeveler によれば、Female Gothic は "victim feminism" の一種で、弱さを装い、演出することで女性の力を得ようとするイデオロギーを内包している。このようなイデオロギーは、Female Gothic のメッセージを形成しただけではないと、Hoeveler は述べる。ブルジョワジーの妻や母親としてのアイデンティティや役割を維持しながら、新たに制度化された空間に挑み、妻や母親の役割を保持しつつ、無抵抗でいながらにしてそれらを転覆することを、密かに信じたかった女性の読者たちによって、作品が愛された理由にもなっていたという。Hoeveler がここで想定している読者の考え方は、戦後の 1950 年代や 60 年代のアメリカ人女性たちが一般に感じていたことと似ているのではないか。つまり、Betty Friedan が *The Feminine Mystique* (1963) で述べる「名前のない問題」である。Jackson の物語に女性には戦後である 1950 年代や 60 年代の女性像が色濃く反映されており、それらは現代にも大きく通じる女性像でもある。だからこそ、彼女の物語が現代においても愛されているといえるのかもしれない。*The Haunting of Hill House* (1959) の主人公である Eleanor は決して "courageous heroine" ではないが、Eleanor の受動性の中にも家父長制のような、大きな力に抵抗する様子を読者は読み取ることが出来るのではないか。

Ruth Franklin は伝記 *Shirley Jackson: A Rather Haunted Life* (2016) の中で、Jackson の作品について次のように述べている。

> Jackson's brand of literary suspense is part of a vibrant and distinguished tradition that can be traced back to the American Gothic work of Nathaniel Hawthorne, Edgar Allan Poe, and Henry James. Her unique contribution to this genre is her primary focus on women's lives. Two decades before the women's movement ignited, Jackson's early stories were already exploring the unmarried woman's desperate isolation in a society where a husband was essential for social acceptance. As her career progressed and her personal life became more troubled, her work began to investigate more deeply the kinds psychic damage to which women are especially prone. (3; underlines mine)

ここで Franklin は、アメリカン・ゴシックというジャンルにおいて、女性にスポットライトを当てたことが Jackson のなした貢献であると評価している。同時に興味深いのは、本稿で扱う *The Haunting of Hill House* を執筆時の Jackson は、夫 Hyman との関係が上手くいっていなかったという点である。家族や周りとの関係を上手く築くことが出来ないのは主人公の Eleanor も同じである。

The Haunting of Hill House は Dr. Montague という科学者が、過去に超常現象を体験したことのある人々を呼び集め、超常現象が起こるとされる、丘の上に建つとある屋敷を調査するところから始まる。本作の主人公 Eleanor は過去に超常現象を体験したことのある人物であり、 Dr.

Montague の招待客である。彼女と親しくなると Theodora も同じように Dr. Montague から声がかかった。一方、Luke は丘の屋敷の所有者である Mrs. Senderson の甥で、厄介払いのために Dr. Montague の意思とは関係なく、半ばむりやり調査に加えられた。途中から Dr. Montague の妻である Mrs. Montague と学校の校長である Arthur も屋敷の調査に加わる。Eleanor は次第におかしな言動が目立つようになり、周りから屋敷に憑りつかれてしまったと思われてしまう。最後には屋敷から追い出されそうになった Eleanor は、自分の車に乗り込むと急発進させ、自ら木に衝突して死亡する。彼女の死は自殺と断定された。Dr. Montague は丘の屋敷の超常現象についての研究を発表するが、批判にさらされ学究生活から引退する。結局、丘の屋敷はこれまでとなにひとつ変わることなくひっそりと佇んでいる、というところで物語は終わる。

Franklin は *The Haunting of Hill House* に登場する丘の屋敷は、 Jackson と夫 Stanley Edgar Hyman との結婚生活そのものを表していると解釈している (409)。また、批評家の Darryl Hattenhauer は、同作品に登場し、得意げに屋敷についてうんちくを語る Dr. Montague は、教師であった Hyman の姿を皮肉ったものであると解釈する (156)。確かに、Hyman には教え子が沢山いた——しかも Hyman の教え子たちは全員女性だった——そうである[2]。Dr. Montague が Hyman のパロディであるかどうかは考察の余地があるが、いずれにせよ *The Haunting of Hill House* において、Eleanor が感じる抑圧や圧迫感が、「家」と関係しており、その家父長的な背景を持つ丘の屋敷が Eleanor を飲み込もうとする物語であるといえる。そしてこの抑圧とは、Jackson がまさに日々の暮らしの中で感じていた感覚と重なるものである。Franklin によれば、Jackson は晩年に広場恐怖症を患い、家から一歩も出られない時期があり、大好きだったドライブも満足にできなくなっていたという (419)。Jackson もまた、家庭や家族が自分を飲み込もうとしている、と感じていたのかもしれない。

こうした Jackson の伝記的事実を踏まえた上で、本稿では、*The Haunting of Hill House* の Eleanor に着目し、何故 Eleanor は最後に犠牲になる必要があったのか、つまり自らの死を選ぶ結果になってしまったのかを、Jackson の描く Eleanor の描写に着目しながら考察する。

丘の上の屋敷—不在の母と取り込まれる娘

Eleanor が Dr. Montague の招待を受け、丘の屋敷に行こうと決心したひとつの理由に、彼女がながらく介護をしていた母親が死去したタイミングであったことがあげられる。いわば、それまで母親によって家に縛り付けられていた Eleanor が自由に行動することが出来たのである。

[2] Jackson は夫が家庭を顧みていないと感じていたようで、夫に宛てた手紙の中には夫に対する不満が伺える。自分以外の女性に関心を持っていることも不満の一つだった。Ruth Franklin の *Shirley Jackson: A Rather Haunted Life* に“[Hyman's] obsessive devotion to teaching and to his students, female all. . .”(407-8)という記述がある。

The Haunting of Hill House における母と娘の関係については、Roberta Rubenstein や Judie Newman、Tricia Lootens など、多くの研究者が注目してきた[3]。これは、作品内で Eleanor が常に母親の存在を意識していることからも容易に読み取れるものだ。Eleanor は母親に対して罪の意識を持っている一方で、母に対して非難する気持ちもある。“She could not remember ever being truly happy in her adult life; her years with her mother had been built up devotedly around small guilts and small reproaches, constant weariness, and unending despair” (*The Haunting of Hill House* 245、以下 *The Haunting*). そのため Eleanor は大人になってから心から喜べる瞬間がなかったのである。女性作家によって書かれた、女性主人公が登場する Female Gothic の特徴を、Rubenstein は次のようにまとめている。

> . . . [T]hese narratives authored by women and focusing on female protagonists, traditional elements of the Gothic genre are elaborated in particular ways, notably through the central character's troubled identification with her good/bad/dead/mad mother, whom she ambivalently seeks to kill/merge with; and her imprisonment in a house that, mirroring her disturbed imaginings, expresses her ambivalent experience of entrapment and longing for protection. (130)

女性のゴシック文学において、母親という存在に対する娘の複雑な感情が書かれるという考察は、本作品にもあてはまる。さらに Rubenstein は、今までの Female Gothic のナラティヴに新たな視点を加えて分析した。それが食べ物(food)である。 Rubenstein は丘の屋敷で食べ物が提供される様子がきわめて機械的で、母親的な雰囲気とはかけ離れていること、そして作中には “swallow” や “eat” や “consume” などの言葉が用いられ、屋敷に飲み込まれる、食べられる、取り込まれるというイメージが散見されることに注目している (135)。 Rubenstein は食べ物や食という行為に着目することで、母に対する一見かけ離れたふたつの感情、すなわち母への非難の気持ちと母と同一化したいという気持ちを両立させることに成功している。

丘の屋敷は、もともとは Hugh Crain という人物が建てた屋敷だったが、彼の妻はふたりの幼い息子を名残して亡くなってしまった。その後再婚した妻達も次々に亡くなっていた、という背景があった。Judie Newman は Hugh Crain の妻たちが次々に亡くなってしまったことで、丘の屋敷には常に母が不在であったことに着目し、丘の屋敷自体が母の代わりとなって、Crain の娘たちを育てた、とも考えられると述べている (“Since Hugh Craine[sic]'s two daughters were therefore brought up without a mother, the house is simultaneously associated with mothering and motherlessness” (174).)。丘の屋敷は母の存在を欲している子どものような存在でもあったが、Crain 姉妹を育てた母でもある、という逆説的な存在であると指摘している (174)。さらに Newman は母の再生産に注目し、繰り返される母親からの娘の支配について論じている (175)。母にとって自分の娘とは分身のよ

[3] 他にも Darryl Hattenhauer や、Andrew Smith、Dale Frederick Bailey などが *The Haunting of Hill House* における母と娘の関係について論じている。

うな存在であり、特に乳児のときは緊密な共生関係が生まれている。しかしその後の自己形成が上手くいかなければ、Eleanor と Eleanor の母のように、母と娘の関係は歪なものとなる (171)。たしかに、本作品での Eleanor は、母の意識下からいつまでも逃れられず、まるで母親に所有されているかのように、亡くなった母のことを常に意識しているように描かれている。

また Tricia Lootens は屋敷や家が持っている母親的な側面に着目している ("In its form, Hill House is now a parental house. Warped to fit the mind of the vicious patriarch, it is furnished with symbols of the destructive power of motherhood" (157).)。丘の屋敷ではダドリー夫人によって食べ物が用意され、寝る場所も、憩いの場も用意されていて一見心地よい空間であるが、歪んだ形に建てられているためドアを開けていても勝手に閉まってしまう。つまり、外に出るのを拒むかのように、中にいるものを閉じ込めてしまうのだと Lootens は解釈する (158)。

丘の屋敷には常に母親が不在だったことにより、Eleanor を取り込もうとしたと考えれば確かに納得がいく。しかし、このままだ丘の屋敷を建てた Hugh Crain の影響が見えてこない。Hugh Crain はわざと歪な形の丘の屋敷を建て、娘にも強烈な道徳教育を行っていた。Hugh Crain の家父長制とも取れる影響力はかなり根深いものだと考えられ、このことについても視野に入れる必要があるだろう。

超常現象とリアリティ

屋敷の中で起こる超常現象が現実のものであるのか、それとも主人公の Eleanor が作り出したものなのか、ということは *The Haunting of Hill House* を分析する上でよく挙がる議論の一つであり、先行研究でも Dale Bailey や Hattenhauer、Franlkin の間で意見が分かれている。もしも、この物語を ghost story と捉えるのであれば、全ての超常現象は実際に起こったことだと認識出来るであろう。一方で Eleanor は周縁化された女性の一人であり、孤独で不安定な存在だからこそ、この物語で起こる超常現象は彼女の妄想だと考える読者がいても不思議ではない。

例えば、丘の屋敷での生活に慣れてきたころに、昼寝をしようと思い Eleanor と Theodora がそれぞれの部屋へ行くと、Theodora の壁と服が血だらけになっていた事件について、Dale Bailey は *American Nightmares : The Haunted House Formula in American Popular Fiction* の中で次のように述べている。

> The fetid fluid, suggesting menstrual blood, implies a puritanical vision of female sexuality as physically foul and morally corrupt. At some level, Eleanor wishes to punish Theo for her sexual transgressions-and, by extension, to punish that aspect of her own personality which harbors similar desires. The bloody words scrawled over Theo's bed . . , a message from her hidden self. Reject the temptation Theo represents. Punish the whore, come home to the virgin. (40)

Bailey は血を女性のセクシュアリティの表象と考え、Eleanor は性に開放的な Theodora と同時に、同様の性的欲求を持つ自身も罰したいと思っていたと記述している。この考え方は、屋敷を創設した Hugh Crain の考え方とも似ている。Hugh Crain が自分の娘である Sophia Anne Lester Crain に残したスクラップブックの中には七つの大罪について書かれた部分があり、特に欲望 (lust) の部分では Luke が"[Hugh Crain] outdid himself" (*The Haunting* 363)と書いているように、七つの大罪の中でも一番力を込めて書かれた部分だった。もしも Eleanor が Theodor と自分自身を罰したいと考えていたのだとしたら、まるで丘の屋敷を建てた Hugh Crain の思想が Eleanor に乗り移ったかのようだ。Melanie Anderson は *Shirley Jackson, Influences and Confluences* (2016) において、丘の上の屋敷の説明しがたい雰囲気は、Eleanor が屋敷に来る前に直面していた悲惨な世界を反映したものであると考察する。"The inexplicable and dangerous supernatural atmosphere in Hugh Crain's Hill House is a microcosm of the damaging world Eleanor faced before she arrived, embodied in her own family relationships, or the lack thereof" (48). 確かに丘の屋敷で生活をしているうちに Eleanor は丘の屋敷の外の世界のことを思い出せなくなっている。Eleanor は "Is there still a world somewhere?" (*The Haunting* 348) という疑問を投げかけながら "I can't picture any world but Hill House" (*The Haunting* 348) と、Mrs. Dudley が用意した桃のショートケーキを見続けながら言うのである。屋敷の世話をしている Mrs. Dudley が出入りしていることはわかっているため、外の世界があることを認識していないわけではないが、Eleanor にとっては屋敷での生活が自分の生活の全てになっていた。Bailey はチョークで廊下の壁に書かれた "HELP ELEANOR COME HOME ELEANOR" (*The Haunting* 345) という文字も、血も Eleanor による自作自演だという見解を示しているが、裏付けとなる記述は作品中にはない。

Hattenhauer もまた、超常現象は実際にはなかったという見方をしている。たとえば、Eleanor と Theodora は手を握りあっていたはずなのに、実際には Theodora は Eleanor の傍にはいなかったという超常現象とも思われた出来事も、結局は Eleanor は自分自身の手をつかんでいたのだと結論付けている (162)。しかし、Franklin はこの見解に異を唱えている(414)。この物語は基本的には Eleanor の視点で語られるので、登場人物に降りかかる超常現象を客観視することは難しい。全てが Eleanor の仕業であるのか、それとも屋敷の呪いなのか、あるいは屋敷が Eleanor に憑りついているのか、といった疑問は作品内ではっきりとは説明されない。

The Haunting of Hill House の登場人物の中で、超常現象を解明することに最も熱心な人物の一人が Dr. Montague である。Eleanor と Theodora は屋敷に到着して二日目の夜に超常現象を体験する。丘の屋敷には Eleanor 達の他には誰もいないはずなのに、何者かが Eleanor 達のいる部屋のドアを何度も叩いたのだ。この時点では超常現象を実際に体験したのは Eleanor と Theodora の二人だけであるが、Dr. Montague は二人の言うことを否定はしていない。彼は実に理性的に昨夜の出来事を分析するのである。

> No ghost in all the long histories of ghosts has ever hurt anyone physically. The only damage done is by the victim to himself. One cannot even say that the ghost attacks the mind, because the mind, the conscious, thinking mind, is invulnerable. . . .No, the menace of the supernatural is that it attacks where modern minds are weakest, where we have abandoned our protective armor of superstition and have no substitute defense. . . [T]here was certainly something going on in Hill House last night, and the mind's instinctive refuge—self-doubt—is eliminated. (*The Haunting* 340)

この Dr. Montague の視点はこの物語を解釈する上で重要である。なぜなら、これがこの物語の超常現象に対する見解になるからである。Mona Gad は *Abnormality in the Fallen World of Shirley Jackson's Gothic Horror* (2017) の中で、先に引用した一節に着目し、次のように説明している。"So the problem is not in the supernatural or the eerie, but in the human mind that adapts things to the human psychology. This adaptation either goes with the reason in normal cases, or violates it in abnormal cases/psychological disorders" (60). 幽霊のような超自然的な存在がいない限り説明がつかないような出来事が自分の身に降りかかるとき、人は精神的に疲弊するだろう。Eleanor たちの身に起きた超常現象について Dr. Montague は "We cannot say, 'It was my imagination,' because three other people were there too" (*The Haunting* 340)と結論付ける。しかし Eleanor が "I could say, . . . All three of you are in my imagination; none of this is real" (*The Haunting* 340)と述べたことで、Dr. Montague は "If I though you could really believe that, . . . I would turn you out of Hill House this morning" (*The Haunting* 340)と言うのである。この Dr. Montague の発言により、Eleanor は自分だけが責められ、追及された気になり、悔しさを覚える。Eleanor が Dr. Montague の物言いにショックを受けるのには理由がある。Anderson は Dr. Montague が感知できない領域について次のように述べている。

> Consequently the novel contains two levels; on the surface is Dr. Montague's paternal, rational, and supposedly scientific quest to explain the supernatural, whereas underneath that investigation and unnoticed by Montague is Eleanor's real struggle as she attempts to find a home in a society that does not value her as an unprotected and unattached woman. (48)

この小説の中には科学的——それはとりもなおさず父的で合理的 (paternal, rational) である——に感知できる世界と、感知できない世界が存在しており、科学的に感知できない世界にいる Eleanor の女性としての苦悩は誰からも理解されることがない。作中では通常起こりうるはずのないことが起こることによって、登場人物が怯えたり、弱ったりしていく様子がはっきりと書かれるが、Henry James の *The Turn of the Screw* (1898) のように、主人公が実際に幽霊を目撃するという記述はない。だからこそ超常現象が本当に起こっているのかどうかが判然としない本作品は、だからこそ解明したいという欲求を読者に感じさせる。だが、この解明しようとする欲求そのも

のが、丘の屋敷に対するひとつの見解へと収斂させようとする欲望であり、それは Dr. Montague 的なふるまいへとつながっていく。丘屋敷で起こる超常現象を解明しようとする Dr. Montague の行為は Eleanor を屋敷から排除しようとする動きにつながる。さらに、他の人々も Eleanor を屋敷から排除しようとする Dr. Montague に加担する。Theodora も "Do you *always* go where you're not wanted?" (*The Haunting* 390; emphasis original) と、Eleanor を邪魔者扱いをする。Luke や Mrs. Montague や Arthur も同じである。そう考えると、読者を含めた世の中全体が Eleanor のような存在を排除しようとしている、と考えられるのではないだろうか。

"Supernormal"な Eleanor

The Haunting of Hill House には超常現象を指す言葉として、"supernormal" という言葉が用いられている。勿論、より耳なじみのある"supernatural"という言葉も登作品内には使用されているが、"supernormal" の方がより通常 (normal) とは異なる状態である、という響きが強い。少なくとも 1950 年代の女性として Eleanor は "normal" とは言えないだろう。Eleanor は 32 歳の独身女性であり、長年介護をしていた母は死に、唯一の家族と呼べる姉や義理の兄たちとは仲が悪く、家と呼べる場所もない。Mary P. Ryan は *Womanhood in America: From Colonial Times to the Present* (1983) の中で、戦後のアメリカにおいて女性にとって結婚をすることが理想であると特に強調されていた時代であったと述べている (260)。つまり、家族は近代的な社会組織と対立するものであり、これまで以上に外界から切り離されたものであった。Jackson の短編の中に"The Daemon Lover" (1948)[4]という結婚を題材にした作品がある。名前のない主人公は Jamie という男性と結婚をする約束をしていたが、約束の時間になっても彼が迎えに来ないので彼を探しに出かける。やがて主人公は Jamie を見かけたという少年の話を聞いて、あるアパートにたどり着く。Jamie が部屋から出てきたら何と言おうかと想像しながら、主人公はアパートの最上階の部屋のドアを叩く。しかし誰も出てこない。その後、一週間通い詰めたが、戸口を出てくるものは誰もいなかった、というところで物語は終わる。主人公は結局、Jamie に嘘をつかれており、Jamie ははじめから結婚をするつもりがなかったのかもしれない。あるいはそもそも Jamie という男性は存在しておらず、全ては主人公の妄想だったと考えられる。

この曖昧性は *The Haunting of Hill House* に起きる超常現象とも似ている。しかも、主人公の年齢は 34 歳で、Eleanor と年齢も近い。約束の時間を過ぎても Jamie が訪れないことに主人公が焦燥感を覚える様子は実にリアルに描かれている。最後の場面で Jamie がいると信じているドアを叩き続けている主人公の描写は、強迫観念にとりつかれているかのようだ。このように"The Daemon Lover"は結婚の必要に迫られる女性を描いた作品だといえる。

---

[4] タイトルからも分かるようにこの作品は Elizabeth Bowend の"The Demon Lover" (1941) の影響が少なからずあっただろうと考えられる。どちらも幻と思われる男性が登場する、パラノイアの物語として読むことも出来るだろう。

Sandra M. Gilbert and Susan Gubar は *Madwoman in the Attic: The Woman Writer in the Nineteenth-Century Literary Imagination* (1979) の中で、枠組みにはめられる (framed up) 女性について次のように記されている。

> The roots of "authority" tell us, after all, that if woman is man's property then he must have authored her. . . As a creation "penned" by man, moreover, woman has been "penned up" or "penned in" As a sort of "sentence" man has spoken, she has herself been "sentenced": fated, jailed, for he has both "indited" her and "indicted" her. As a thought he has "framed," she has been both "framed" (enclosed) in his texts, glyphs, graphics, and "framed up" (found guilty, found wanting) in his cosmologies. (13)

この一節は、丘の屋敷のもともとの所有者 Hugh Crain を想起させる。彼がスクラップブックに自らの血で "Live virtuously, be meek, have faith in thy Redeemer, and in me, they father. . ." と書き記したように (*The Haunting* 363)、娘が父によって縛られている様子、娘が父の掲げる枠組みにはめ込まれている様子が読み取れる。

Eleanor は作中で何度も "journeys end in lover's meeting" というフレーズを口にするが、このフレーズもまさに運命の出会いによってハッピーエンドを迎える、一種のおとぎ話のような枠組み (framework) の一つのように思われる。しかし、Jill E Anderson は Eleanor の唱える "Journeys end in lover's meeting" のフレーズにはより広い意味があると論じている。

> In a world in which a young woman's options are fairly limited, the painfully shy Eleanor cannot ultimately reconcile herself to a life that might include, after meeting Theodora a same-sex companion. While some critics label Theodora explicitly lesbian, the doubling that occurs with Eleanor marks her as queer presence in the novel as well. Eleanor has a mantra —"Journeys end in lovers meeting"—and it serves to remind her that not only does her excursion to Hill House hold the possibility of new future for her but also the journey will presumably end in some manner. Besides, "lovers" is general enough to cover multiple possibilities. (163)

ここで Anderson は Theodora がレズビアンであるかことを示唆しているが、作品中では彼女のセクシュアリティは明示されていない。もっとも出版される前の最初の段階では Theodora はレズビアンであると明示されていたらしい[5]。だが、重要なのは、"Journeys end in lover's meeting" は女性が男性と運命の出会いを果たす、というありふれた異性愛的枠組みだとは限らないということだ。Emily Banks は Eleanor が丘の屋敷に行くことによって何かが変わるかもしれないと、現在の状況

[5] Ruth Franklin の *Shirley Jackson: A Rather Haunted Life* に"In early drafts of the novel, she is openly lesbian." (412)という記述がある。

から脱しようと模索していた事に着目し、丘の屋敷は避難場所であったと指摘している (170)。そして、丘の屋敷から出た後のことを想像した Eleanor は真面目な顔で Theodora に "I'm coming with you. . . .back home. . ." (*The Haunting* 389) と言う。これもまた、男女という異性愛的枠組みにとらわれない選択だったが、Eleanor の提案は Theodora に断られてしまう。この後で丘の屋敷を出ていくことになってしまう Eleanor は、帰る場所もなく、枠にはまることも、彼女自身であり続けることも出来なくなってしまった存在なのだ。

終わりに—理想と現実の乖離

Jackson と夫 Stanley Edgar Hyman の結婚生活は順風満帆だったとは言えないかもしれないが、Hyman は、作家としての Jackson が生み出した作品を高く評価していたと言えるだろう。Hyman は *The Magic of Shirley Jackson* の序文の中で Jackson 自身が作家として自分の作品に誇りを持っていたことからもそれがわかる。

> For her entire adult life she regarded herself as a professional writer, one who made a living by craft of writing, and as she did not see that vocation as incompatible with being a wife and mother, so she did not see her dedication to art as incompatible with producing art in salable forms. (viii)

Jackson は作家でありながら、妻であり母でもあった。Hyman は Jackson が作家として成功していたのを認めつつ、文壇からはもっと高い評価を受けるべきだったと感じていた[6]。彼女のエッセイである *Life Among the Savages* (1953) には Jackson 自身がプロの作家と主婦の両立しており、彼女自身もそういった生活に対して不満はなかったようだが、いろいろな場面で折り合いをつけなければならなかったことを告げている (386)。*Life Among the Savages* やその続編である *Raising Damon* (1957) のコミカルな文体の裏には戦後のアメリカを生きる女性の葛藤が存在する。Bernice M. Murphy は Nancy Walker の "women humor" の考えを参考にしながら、Jackson を含め、戦後の女性作家たちが描いた "domestic humor text" には、世の中が求める主婦の基準と現実の自分との間に溝が存在することが示されていると指摘している ("The titles of the most popular domestic humor text of the postwar period reflect the impossibility of meeting rigid societal expectations" (10).)。Murphy は *Life Among the Savages* で Jackson が初めてバーモントにある家を訪れたときと、Eleanor が初めて丘の屋敷に訪れたときの反応の類似性を指摘している (12)。

Jackson が常に感じていたのは、理想と現実の乖離であったといえよう。契約満了のためニューヨークの家を出ていかなければならなくなった Jackson は、都会から離れた土地での生活を思い

---

[6] Hyman は *The Magic of Shirley Jackson* の序文の中で"For all her popularity, Shirley Jackson won surprisingly little recognition. She received no awards or prizes, grants or fellowships. . .which it clearly belonged, or which it should have led" (ix).と述べている。

描いていた（“Our fondest dream had been to move to Vermont, to a where a couple we knew had settled. . . and now suddenly it looked overwhelmingly as though we moved either to Vermont or to a tent in the park” (*Life Among the Savages 387*).)。山々が見え、子どもたちが遊べる庭があり、冬にはきれいな雪が降り、手ずからにんじんなどを育てる。そんな郊外の暮らしを Jackson は夢見ていたが、転居先のバーモントに行き、実際の家を見て驚く。Jackson は壊れた床板を避けて慎重に進みながら、夫と共に家の中を見ている様子が *Life Among the Savages* に実に奇妙に描かれている。

The Haunting of Hill House にも理想として掲げられるイメージと現実の齟齬が存在している。理想の家を探し求めていた彼女も、丘の屋敷にたどり着いてみる自分の思い描いていたその理想とは程遠い。しかし、丘の屋敷で生活をしているうちにその世界が自分のすべてだと思うようになる。Eleanor は丘の屋敷から追い出されそうになるが彼女は最後まで抵抗をする。求められる自分との実際の自分の間に存在する溝を Eleanor も感じていたが、最後までその溝は埋まることはなく、最終的に彼女は死を選ぶ。Eleanor が犠牲となり、死ぬ間際に “Why am I doing this? Why don’t they stop me?” (*The Haunting* 417) と疑問を投げかけることで、Jackson は世の中に存在している理想と、その理想に当てはまらない存在を浮き彫りにしているのである。

参考文献

Anderson, Melanie. “Perception, Supernatural Detection, and Gender.” *Shirley Jackson, Influences and Confluences*, edited by Melanie R. Anderson and Lisa Kröger. Routledge, 2016.

Anderson, Jill E. “The Haunting of Fun Home Shirley Jackson and Alison Bechdel’s Queer Gothic Neodomesticity.*” Shirley Jackson, Influences and Confluences*, edited by Melanie R. Anderson and Lisa Kröger. Routledge, 2016.

Bailey, Dale Frederick. *American Nightmares: The Haunted House Formula in American Popular Fiction*. U of Wisconsin P, 1999.

Banks, Emily. “Insisting on the Moon: Shirley Jackson and the Queer Future.” *Shirley Jackson and Domesticity: Beyound the Haunted House*, edited by Jill E. Anderson and Melanie R. Anderson. Bloomsbury Academic, 2021, pp. 7–25.

Bernice M. Murphy. “Hideous Doughnuts and Haunted Housewives: Gothic Undercurrents in Shirley Jackson’s Domestic Humor,” *Shirley Jackson and Domesticity: Beyound the Haunted House*, edited by Jill E. Anderson and Melanie R. Anderson. Bloomsbury Academic, 2021, pp. 169–88.

Franklin, Ruth. *Shirley Jackson: A Rather Haunted Life.* W. W. Norton & Company, 2016.

Gad, Mona. *Abnormality in the Fallen World of Shirley Jackson’s Gothic Horror.* LAP Lambart Academic Publishing, 2017.

Gilbert, Sandra M. and Gubar, Susan. *Madwoman in the Attic: The Woman Writer in the Nineteenth-Century Literary Imagination*. Yale UP, 1979.

Hattenhauer, Darryl. *Shirley Jackson's American Gothic*, State U of New York P, 2003.

Jackson, Shirley. *Novels and Stories : “The Lottery”, The Haumting of Hill House, We Have Always Lived in the Castle, Other Stories and Sketches.* The Library of America, 2010. 渡辺庸子訳『丘の屋敷』創元推理文庫、1999 年。

---. *The Magic of Shirley Jackson*, edited by Stanly Edgar Hyman. Farrar Straus and Giroux, 1966.

Looten, Tricia. “‘Whose Hand Was I Holding?’: Familial and Sexual Politics in Shirley Jackson’s *The Haunting of Hill House*.” *Shirley Jackson: Essays on the Literary Legacy*, edited by Bernice M. Murphy. McFarland and Company, 2005, pp. 150–68.

Newman, Judie. “Shirley Jackson and the Reproduction of Mothering: *The The Haunting of Hill House*.” *Shirley Jackson: Essays on the Literary Legacy*, edited by Bernice M. Murphy. McFarland and Company, 2005, pp. 169–82.

Ryan, Mary P. *Womanhood in America: From Colonial Times to the Present.* F. Watts, 1983.

Rubenstein, Roberta. “House Mothers and Haunted Daughters: Shirley Jackson and Female Gothic.” *Shirley Jackson: Essays on the Literary Legacy*, edited by Bernice M. Murphy. McFarland and Company, 2005, pp. 127–49.